



Title	新世代中国人の日本留学：なぜ彼らは神様の子になったのか
Author(s)	範，玉梅
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2839
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【9】

氏 名	範 玉 梅
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学 位 記 番 号	第 22432 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 9 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	新世代中国人の日本留学－なぜ彼らは神様の子になったのか
論 文 審 査 委 員	(主査) 教授 青木 直子 (副査) 教授 真田 信治 准教授 石井 正彦

論文内容の要旨

中国の経済成長と一人っ子世代の成人に伴って、日本への留学生は若年化し、またそのメンタリティも大きく変化している。それに伴い、これらの若者を来日直後に受け入れる日本語学校は、学習動機の維持、生活面での指導の必要性など、様々な新たな問題に直面している。本論文の目的は、中国人留学生が多く集まる教会をフィールドとしてエスノグラフィックな調査を行い、これらの若者の成長の軌跡を追うとともに、教会のシステムがその成長をどのように支えているのかを明らかにすることによって、日本語教育への示唆を導きだそうというものである。論文は 3 部構成となっている。分量は 400 字詰め原稿用

紙約1,150枚である。

第1部1章では、研究の背景として、留学生を受け入れる側である日本と、送り出す側である中国の社会と政策の変化を歴史的にたどり、在日中国人留学生を取り巻く諸状況を検討している。第2章では、一人っ子研究、新世代中国人留学生研究、および社会と宗教に関する研究という3つの領域の先行研究をまとめている。第3章では、研究の背景と先行研究を踏まえて、本研究の目的と位置づけを述べている。

第2部は方法論を扱っており、第4章では、エスノグラフィーとは何かを簡単に述べた上で、この研究がエスノグラフィーを採用した根拠を論じている。第5章では、研究の過程を詳細に記述することで、エスノグラフィーをどのように応用したかを示している。第6章は、本研究における分析戦略を解説している。第7章では、フィールドにおける調査者としての申請者の立場を検討している。

第3部は結果と考察である。第8章ではフィールドとなったK教会の様子を描いている。第9章は、K教会に所属する4人の中国人留学生の成長の物語であり、中国における子ども時代から現在に至るまでを、参与観察とインタビューによって詳細に描き出している。第10章は、教会のシステムの記述であり、一人一人の若者が目的の異なる複数の小集団に所属し、そこでだんだんに指導的立場になっていくことで、若者同士の学び合いを支える環境を創っていること、小集団の活動には信仰と同時に遊びの要素も取り入れられていること、牧師夫妻の若者たちへの心配りと肯定的な言葉づかいや態度が教会に集う若者たちの人間関係にも影響し、それが彼らに居心地のよい居場所を提供していること、またそれが若者たちがキリスト教の基本概念である「愛」を理解する手がかりになっていることなどを、参与観察と牧師へのインタビューをもとに明らかにしている。第11章は、ここまで分析から導きだした、物語、他人、学びというキーワードに注目し、それら相互の関連性と、個人の成長における学びの意味、居場所の意味を論じている。第12章は、K教会の実践を踏まえて、日本語学校における学びの再生の可能性を探っている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、3年あまりのフィールドワークで収集した膨大なデータを、4人の若者の成長の軌跡と教会のシステムという2つの観点から詳細に記述・分析することによって、教会で何が起きているのかを重層的に描き出し、これらの若者たちはなぜ教会に集まるのかという疑問の答えを説得力を持って提示した労作である。中国一人っ子世代の日本留学という極めて今日的な現象を扱ったパイオニア的研究であるという点で、学問的意義はすでに大きいが、本論文の価値はそれだけではなく、類似のテーマをもった研究が、日本語学校の授業、アルバイトなど、これらの若者の留学生活の部分を扱うにとどまっているのに対し、一人一人の若者の生育史、生活世界を包括的に記述したという点で大きく評価できる。教会のシステムを、教育学における最新の学びの理論に照らし合わせて読み解いたこ

とも大きな成果である。これらの分析は、日本語学校という場の持つ問題点を明確に浮かび上がらせている。この論文から日本語教育関係者が学ぶべきことは多く、その意味で社会的意義も大きいと言える。

しかし、この論文に不足がないわけではない。まず、無駄があるというわけではないが、饒舌にすぎるのではないかという感は否めない。書くべきことを取捨選択すれば、もう少しすっきりとした論文になったのではないか。また、申請者も述べているように、この教会の抱える問題や矛盾にはほとんど触れられていない。教会を去る若者もいないわけではないが、こうした若者についてもほとんど言及されていない。エスノグラフィーという研究の性質上、フィールドについての否定的な事柄は書くわけにはいかないという事情は理解できるが、これらの事柄を少しでも考慮すれば、読者のこの教会についての理解はより深いものになるのではないか。最後に、最終章での日本語学校への提言は、もっともだと思わせるものではあるが、日本語学校がおかれた財政的状況、教師教育の現状などを考えた時に、本当に実行できるのかという思いが残る。日本語学校を取り巻く状況をもう少し広い視野で検討した上で、実行可能な提言をしたほうがよかっただろうと思われる。しかし、これらの不足は本論文の博士論文としての価値を下げるものではない。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。